

東筑紫学園経営史

(1) 創立から昭和20年代まで

昭和11（1936）年3月、東筑紫学園は「筑紫洋裁女学院」の創立によって、教育の世界への第一歩が刻まれたのである。

昭和11年は、世界的に見れば、1929年のニューヨークのウォール街の株価大暴落に端を発する世界大恐慌の嵐が全世界を覆い、さらに1933年には震源地のアメリカの失業率が25%に達し、世界経済が大混乱を呈していた時期であった。

わが国においても、昭和恐慌にこの世界恐慌が加わり、これに三陸の津波の被害とも合わせて東北を中心とする農民の貧窮は深刻となり、身売りする農村の娘や欠食児童が増加した時期でもあった。

そして、この我が国の惨状を憂える青年将校（特に青年将校の出身は東北が多かった）を中心として、「昭和維新」が唱えられ、昭和7（1932）年には「五・一五事件」、昭和11（1936）年には「二・二六事件」が発生し、軍部及び政府の首脳の暗殺が起きたり不安に満ちた時期であった。

まさに、国内外ともに「激動・動乱の昭和」を象徴とする時期に、東筑紫学園は、その産声を上げたのである。

そして、既に我が国と中国との間で「日中戦争」が中国大陸において、展開しており、当時は、戦時体制に置かれた状況でもあった。

「筑紫洋裁女学院」を創立して5年後の昭和16（1939）年、大東亜戦争（太平洋戦争）が勃発し、国家・国民の存亡をかけた戦いが始まった。

戦時下の昭和18（1943）年には、「財団法人東筑紫技芸女学校」が設立認可され、更なる一步を踏み出したのである。この女学校は戦後の昭和22年における学制改革によって「東筑紫女子中学校」となった（昭和38年に「東筑紫短期大学附属中学校」、更に平成元年に「照曜館中学校」と名称変更）

そして昭和22（1947）年、戦後の占領下の混乱の中でその女学校は「財団法人東筑紫学園」に改称された。

次の年の昭和23（1948）年、「東筑紫高等学校」が開校され（昭和38年に「東筑紫短期大学附属高等学校」に名称変更）、更にその2年後の昭和25（1948）年には、「東筑紫短期大学」が開学された。そして昭和26（1951）年、「財団法人東筑紫学園」を改称「学校法人東筑紫学園」とし、新たに学校法人として出発することになるのである。

昭和26（1952）年、「東筑紫幼稚園」も開園され（昭和38年に「東筑紫短期大学附属幼稚園」に名称変更する）、未だ米占領軍による過酷な占領政策の続く占領下であって、次々と学園の屋台骨を作り上げていったのである。

誠に、学園の創立から15年間、我が国及び国際社会の厳しい状況の中での厳しい道のりであった。

しかし、困難の中での学園の挑戦と発展は更に続いた。

(2) 被占領状態からの独立後の昭和27年から昭和61年の本学園創立50年まで

この時代は、我が国が敗戦後8年間にわたる連合国による占領下の焼け野が原から復興に取りかかった時代を経て、昭和27(1952)年発効のサンフランシスコ講和条約によって、我が国が独立国として、主権を回復した時代から、いよいよ我が国が本格的な復興を目指していく時代である。

特に、昭和29(1954)年から昭和48(1973)年までの19年間は、我が国における復興が急激に続いた時期であり、歴史上「高度経済成長期」と呼ばれる時代である。

この時期の経済成長率は、毎年10%を超え、同時期の欧米の成長率の2~4倍にもなった時期である。この右肩上がりの時代に雇用制度も「年功序列型賃金」と「終身雇用制度」が、定着していった時代でもあった。

この高度成長時期は、本学園においては、短期大学において、新たに2学科が新設された。昭和29(1954)年に「保育科(平成元年に「保育学科」に名称変更)」及び昭和33(1958)年に「栄養科(平成元年に「食物栄養学科」に名称変更)」である。

これ以降、昭和61年の創立50周年に至るまでのおよそ30年間は、東筑紫学園が教育を通して社会に貢献しつつ、その土台を固めていった時代である。

(3) 創立50年から創立80年まで

本学園が創立50周年を迎えたその年に、激動の昭和の時代を国家元首として担ってこられた昭和天皇が昭和61年にご逝去あそばされ、昭和の時代が幕を閉じた年でもあった。

そして、新しき元号「平成」に改元され、平成の御代が開かれた年に、東筑紫短期大学の被服科が**生活文化学科**に名称変更されただけでなく、新たな学科として装いを新たにした。東筑紫学園中学校も**照曜館中学校**に名称変更するとともに、大学受験に特化した英才教育を中心とする進学校として新生したのである。

躍進を続ける学園であったが、時代背景は、少子高齢化という、教育業界にとって未曾有の危機が忍び寄る時代に突入していくのである。

東筑紫学園においても、この少子化という危機を如何に乗り越えていくかが喫緊のそして永遠の課題でもあった。

しかし、少子高齢化の時代が来ることは、既に、20年以上（昭和50年代）も前から想定できていたことである。特に短期大学が、その厳しい状況下で生き残るのは、将来を見越した、準備と、教職員の共通理解が必要であった。

そして、今から訪れる危機に対して、座して死を待つのではなく、積極果敢に打って出る道を選択することになる。

それが、4年制大学と短大専攻科の設立である。その設立のための設置準備室が平成10年に発足した。「九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学専攻科設置準備室」である。

まさに、生き残りをかけた新たな挑戦が始まったのである。

そして、3年後の平成13年に九州栄養福祉大学が開学し**食物栄養学科**が設置された。

次の年の平成14年には**東筑紫短期大学に専攻科介護福祉専攻**が設置された。その2年後には、国立の労働福祉事業団九州リハビリテーション大学校を継承し、**学校法人東筑紫学園専門学校リハビリテーション大学校**として開学した。

そのあくる年の平成17年には九州栄養福祉大学大学院を開学し、**食物栄養学研究科食物栄養学専攻修士課程**（平成24年に食物栄養学研究科を健康科学研究科に名称変更を行う）を設置した。

更に、平成18年には**東筑紫短期大学に美容ファッションビジネス学科**を設置し、被服科から始まった学科が、トータルファッションを掲げて、新時代のファッションの先端を行くべく生まれ変わったのである。

平成23年には、九州栄養福祉大学リハビリテーション学部理学療法学科、**作業療法学科**を設置し、専門学校九州リハビリテーション大学校を発展的解消し、大学学部として昇格させた。

又、平成29年に、福岡及び九州で大学附属幼稚園としては、初めての認定こども園として社会及び国家の要請に応えるべく「**認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園**」が開園した。

九州栄養福祉大学が開学してからの今日までのおよそ20年間、まさに、ピンチをチャンスに転換する怒涛の進撃ともいえるものであった。

そして、幼稚園から中・高等学校そして短大・大学・大学院までの総合学園として、これからの更なる100年に向けて東筑紫学園は、「**筑紫の心**」という筑紫魂に基づく**建学の精神**による人間教育に基づき社会に貢献し続けていくのである。